

小学校への期待と小学校生活の満足度への
幼稚園の園舎環境・きょうだいの影響

大島みずき

群馬大学教育実践研究 別刷
第37号 317～323頁 2020

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

小学校への期待と小学校生活の満足度への 幼稚園の園舎環境・きょうだいの影響

大 島 みずき

群馬大学大学院教育学研究科 教職リーダー講座

The influence of kindergarten environment and siblings
to expectation and satisfaction for elementary school.

Mizuki OSHIMA

Program for Leadership Education, Graduate school of Education, Gunma University

キーワード：保幼小連携，期待，環境，きょうだい

Keywords : Comparison of kindergarten and elementary school, expectation, environment, sibling

(2019年10月31日受理)

問題と目的

保幼小連携についての問題点

平成30年に施行された幼稚園教育要領において、幼児期が小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながる場であることが明記され（文部科学省，2018），幼児教育施設から小学校への滑らかな移行が望まれている。そのため保育者には小学校とつながる子どもの姿を意識して保育を行うことが、そして小学校の教師には幼児期から培った姿を意識して教育を行うことが求められている。

2000年以降小1プロブレム（教室から出ていく，授業中に立ち歩く，教師の話の聞けない，友達と上手に関われない，国語や算数の学習がわからない，登校しづかりがみられる）という言葉が使用されるようになり，その状態が深刻と言われ，その対処として，幼小の連携が求められてきた。現在ではギャップのある教育活動の場に置かれた子どもが不適応行動を起こすことは当然という考えから，小1プロブレムという記載自体が多くは見られなくなっている（高木，2019）。しかし，その中でも就学前の幼児教育施設か

ら小学校へのスムーズな移行のためにはお互いの教育活動の接続が重要であることが確認されている（松崎，2017）。そのため，幼児教育の要素を取り入れた小学校のスタートカリキュラムと小学校で学ぶことを見据えた保育活動のプログラムが連携して開発されてきている（松崎・無藤，2013）。例えば，大前（2014）は就学前教育と小学校教育との連携を「自立」を視点にデザインする必要があることなどを示している。また，寺田（2013）は保幼小連携のために必要なこととして，子ども同士の交流，保育士と小学校教員の交流，などと共に接続期のカリキュラムの作成をあげている。しかし，その一方で教師がカリキュラムの開発や子ども同士の交流活動といった連携ありきの活動の計画に追われてしまうという問題も指摘されている（石田，2015）。

では，幼児，そして児童は大きなギャップを乗り越えて小学校へ進学すること，そして小学校で生活していることをどのように感じているのだろうか。彼らが持つ期待や不安を幼児教育，小学校の教員が両方の立場から理解することは，保幼小の接続をスムーズにするためにも，接続のカリキュラムを作っていくために

も重要なのではないだろうか。しかし、これまでの研究では幼児教育、小学校教育におけるそれぞれの立場でのプログラムの検討や、それらのカリキュラムの施設間での連携については計画されることが多くなっている一方で、その中にいる子どもの幼児教育施設から小学校への移行時の気持ちに焦点を当てている研究はあまり見られない。本研究では幼稚園から小学校に進学する子どもの小学校に対しての期待および、小学校生活に満足しているかについて検討していくことで、子どもの幼稚園から小学校への滑らかな移行について考えていく。

小学校について「知っている」ことの影響

菊地（2005）が示すように、幼児は「小学生のお兄さんお姉さん」に憧れを抱いていることが多い。大島（2016）は年長児に対し小学生になることが楽しみかを聞き、ほとんどの幼児が「楽しみだ」と回答したことを示しており、多くの幼児が憧れの小学生になることを心待ちにしている様子が見える。実際、幼稚園や保育園、こども園において就学を控えた幼児を観察していると、小学校への進学をとっても楽しみにしているように思える。では、この小学校への期待は何に支えられているものなのだろうか。幼児期の小学校への大きな期待が何に支えられているものであるのかを幼児教育施設と小学校が共有することで、小学校に対する期待を持った幼児を送り出し、さらにその期待に応えるよう小学校が受け入れることができ、子どもたちの小学校へのスムーズな移行の支えとなるのではないだろうか。

進野・小林（2000）は小学校に入学して約1年がたった1年生に「小学校が幼稚園の時にあなたが思っていた通りの小学校だったか」を尋ねている。その結果、およそ半数の児童が「いいえ」と回答している。このことから、幼稚園時代に明確な小学校についての認識を持っていないことが予測される。この認識についての曖昧さなどからくる小学校への期待は幼稚園から小学校への滑らかな移行を妨げてはいないだろうか。

そこで、本研究では幼児の小学校への期待を支えるものの一つに、幼児が小学校について理解していることが関わっているのではないかと考えることとする。小学校について知っており、そこに行く自分を想像することで、小学校進学を楽しみに思えるのではないだろうか。

小学生のきょうだいがいることの影響

幼小連携のプログラムの中にも、子ども同士の交流や、幼児の小学校訪問などが組み込まれることも多く、それらの活動は幼児の小学校への理解に結びつくものだろう。しかし、このようなプログラム以上に幼児にとって、小学校の情報を日常的に与えてくれる存在は、年長のきょうだいではないだろうか。進野・小林（2000）は、第1子と第2子の幼児では小学校に対する期待が第2子の方が高い可能性を上げ、その理由を第2子の方がより小学校の情報を得ているからであると考察している。さらに、岩田（2009）は、幼児と母と年長きょうだい3者の夕飯時の会話を縦断的に検討している。ここでは、就学前の時期にきょうだいの中で教科や学習内容、学校の教育内容にも関わるような内容に関する会話が多く見られたことを示している。生活の中で、きょうだいから小学校の情報を聞くことの多い幼児は、年上のきょうだいがいない幼児に比べ、小学校についての知識が多く、また身近に憧れのモデルとなる小学生がいることで、より小学校に対する期待も高くなることが予測される。

園舎環境の影響

日常的に幼稚園自体が小学校と近い距離にあることでも、幼児の小学校に対する知識は深まり、小学校への期待も高まるのではないだろうか。例えば石田（2015）は品川区の品川第一日野小学校を例に挙げ、小学校・幼稚園・保育園などの施設が同じ敷地内にある環境であれば継続的な連携が期待でき、小1プロブレムの解消にもつながることを示唆している。石田（2015）の研究は保幼小連携に関わることによる教師の意識の変化に焦点を当てており、小学校・幼稚園・保育園が同じ敷地にあるからこそ計画的に複数回行うことができる保育参観や授業参観、子どもたち同士の交流を通して、教師の意識が変わること示している。では、幼児教育施設と小学校が敷地を近くにすることで、子どもにとってのメリットはあるのだろうか。本研究では、施設が隣接することの良さとして、幼児期の子どもが小学校の生活について知る機会が増える可能性をあげ、その効果を検証する。

本研究で対象とする幼稚園は園舎建替のため対象幼児が年長に進学してからの約10ヶ月間、進学先となる小学校の中の仮園舎で園生活を送っていた。特に、調

査の対象となる年長児のクラスは、小学1年生のクラスと同じ並びに保育室が設けられており、小学1年生とトイレを共有するなど小学校の雰囲気を感じることができる環境で進学前の10ヶ月を過ごしたと言える。このように小学校と近い場所で園生活を送ることで対象となる幼児は建替前の、幼稚園と小学校の距離が離れている状況よりも小学校について理解が深くなり、そのことで小学校への期待が高まるのではないだろうか。また、小学校という環境を理解して進学するため、その移行は滑らかなものとなり、進学後に幼稚園と小学校のギャップに驚くことも少なくなることが予測される。

以上のことから、本研究では全ての園児が同じ小学校に進学する幼稚園において、年長幼児の小学校への期待、および小学校生活への満足度に、小学生のきょうだいの有無と、園舎環境（小学校と離れているか、小学校の中にあるか）が影響しているのかを検討することを目的とする。

方法

調査期間：20XX年、20XX+1年2月および7月

調査協力児：20XX年（以下term1）、20XX+1年（以下term2）ともに、2月の時点でA幼稚園に在籍し、A小学校への進学が決定していた年長児。

term1；56名（男児26名、女児30名；小学生きょうだいなし21名、あり35名）

term2；55名（男児33名、女児22名；小学生きょうだいなし18名、あり37名）。

手順：個別の面接調査を行なった（面接時間は2月、7月ともに一人当たりおよそ10分）。ラポール形成後、それぞれの時期で以下の質問を行った。

幼稚園年長時期（2月）¹

【小学生のきょうだいの有無】小学生のきょうだいの有無、およびそのきょうだいの学年。

【小学校への期待】小学校が「楽しい」「楽しみではない」のいずれかを選択後、その程度をさらに2段階で尋ねた（0-3点）。さらに、「小学校では何が楽しみか」についてそれぞれ自由回答を求めた。

小学1年生時期（7月）²

【小学校生活の楽しさ】小学校生活の満足度を測定するために小学校生活の楽しさについての質問を行っ

た。「楽しい」「楽しくないか」のいずれかを選択後、その程度をさらに2段階で尋ねた（0-3点）。さらに、「何が一番楽しいか（何が一番楽しくないか）」についての自由回答を求めた。

【小学校に入って驚いたこと】小学校に入って驚いたことの有無についての質問を行った。あると回答した場合は、何に驚いたのかについて自由回答を求めた。

倫理的配慮：それぞれの調査を実施するにあたり、質問内容や方法について幼稚園長、小学校長に事前に確認していただき、許可を得た。また、調査実施時には本人の同意を得た上で保育室または教室から調査を実施する部屋と一緒に向かい、調査を行う部屋では回答したくない質問には回答しなくてもいいことを冒頭で説明した。

結果

小学校への期待への関連する要因の検討

term1、term2それぞれの幼児期における小学校への期待の得点をきょうだいの有無別に示す（Table 1）。小学校を楽しみにしているかの期待得点についてterm1、term2の時期、小学生のきょうだいの有無を独立変数とする2要因の分散分析を行なった。その結果、有意な主効果は見られず、時期×小学生のきょうだいの有無に有意な交互作用が見られる傾向が示された（ $F(1, 107) = 2.97, p < .10$ ）。単純主効果の検定を行ったところ、term1ではきょうだい有無で得点に差が見られ、きょうだいがいない幼児の方がいる幼児に比べ、小学校への期待が高いことが示された（LSD, $p < .05$ ）。一方、term2ではこのような差は見られなかった。また、term1とterm2ではきょうだいなしの幼児の期待の得点に差のある傾向が見ら

Table 1 時期、兄弟の有無別の幼児期の小学校への期待の程度

	term1	term 2	時期総和
兄弟なし	4.00 (.00)	3.61 (.78)	3.82 (.56)
兄弟あり	3.57 (.85)	3.67 (.63)	3.62 (.74)
兄弟総和	3.73 (.70)	3.65 (.68)	3.69 (.69)

()内はSD

Table 2 幼児が小学校で楽しみにしていること（時期、兄弟の有無別）

回答例	term1			term2			
	兄弟なし (n=21)	兄弟あり (n=35)	兄弟合計 (n=56)	兄弟なし (n=18)	兄弟あり (n=37)	兄弟合計 (n=55)	
勉強	勉強, 授業	9 (42.9)	5 (14.3)	14 (25.0)	7 (38.9)	12 (32.4)	19 (34.5)
教科名	算数, 国語, 図工, 体育など	2 (9.5)	9 (25.7)	11 (19.6)	3 (16.7)	3 (8.1)	6 (10.7)
具体的な学習内容	読む, 書く, 掛け算, ピアノなど	1 (4.8)	4 (11.4)	5 (8.9)	3 (16.7)	6 (16.2)	9 (16.4)
生活	給食, 登校, ランドセル, 宿題, 縄跳び大会など	3 (14.3)	5 (14.3)	8 (14.3)	1 (5.6)	7 (18.9)	8 (14.5)
遊び	サッカー	3 (14.3)	5 (14.3)	8 (14.3)	2 (11.1)	1 (2.7)	3 (5.5)
友だち	新しいともだち, みんなと仲良くしたいなど	0 (.0)	2 (5.7)	2 (3.6)	1 (5.6)	1 (2.7)	2 (3.6)
わからない	分からない, 特になし	1 (4.8)	4 (11.4)	5 (8.9)	0 (.0)	6 (16.2)	6 (10.7)
その他	回答なし, 100点とりたい	2 (9.5)	1 (2.9)	3 (5.4)	1 (5.6)	1 (2.7)	2 (3.6)
合計		21 (100.0)	35 (100.0)	56 (100.0)	18 (100.0)	37 (100.0)	55 (100.0)

()内は割合

Table 3 時期、兄弟の有無別の小学校生活の楽しさの程度

	term1	term 2	時期総和
兄弟なし	3.95 (.22)	3.61 (.70)	3.79 (.52)
兄弟あり	3.91 (.28)	3.81 (.46)	3.86 (.39)
兄弟総和	3.93 (.26)	3.75 (.55)	3.84 (.44)

()内はSD

Table 4 小学校に入学して驚いたことの有無（時期、兄弟の有無別）

	term1		term2	
	兄弟なし	兄弟あり	兄弟なし	兄弟あり
驚いたことあり	17 (81.0)	19 (54.3)	9 (50.0)	20 (54.1)
驚いたことなし	4 (19.0)	16 (45.7)	9 (50.0)	17 (45.9)
合計	21 (100.0)	35 (100.0)	18 (100.0)	37 (100.0)

()内は割合

れ、きょうだいがいない幼児のterm 1の小学校への期待はterm 2より高かった (LSD, $p < .10$)。きょうだいがいる幼児についての得点差は見られなかった。

小学校で楽しみにしていること

term 1, term 2のそれぞれの時期において、小学校進学で楽しみにしていることについてTable 2に示す。時期別にきょうだいの有無による回答の偏りについて検討するために回答カテゴリーごとにその回答を行なった人数と行わなかった人数の偏りを検討する直接確率検定を行なった。その結果「勉強」ではterm 1で有意な偏りが見られた ($p < .05$)。しかし, term 2ではきょうだいによる偏りは有意ではなかった (直接確率検定, n.s.)。また, きょうだいの有無を加味しない時期による回答数についても有意な偏りは見られなかった (直接確率検定, n.s.)。その他のカテゴリーにおいて時期別のきょうだいの有無による有意な

回答の偏り, およびきょうだいを統合した時期による回答の有意な偏りはいずれも見られなかった (直接確率検定, n.s.)。

小学校生活の楽しさについての時期ときょうだいの有無の影響

term 1, term 2それぞれの幼児期における小学校生活の楽しさの得点をきょうだいの有無別に示す (Table 3)。小学校を楽しさ得点についてterm 1, term 2の時期, 小学生のきょうだいの有無を独立変数とする2要因の分散分析を行なった。その結果, 時期についての有意な主効果が見られ, term 2よりもterm 1の児童の方が小学校を楽しんでいると感じていた ($F(1, 107) = 6.78, p < .05$)。きょうだいの有無についての主効果, および時期×きょうだいの有無の交互作用は見られなかった。

Table 5 小学校に入学して驚いたことの時期別の例

	回答内容(term1)	回答内容(term2)
校舎・校庭環境	体育館・校庭が広い/3階がある/広い/図工室などの部屋もある/学校の中に図書館があった	校庭が広い/校舎が広い/色々な部屋がある/畑がある/プールがある/プールが大きい
教室環境	3組まであった/机、席ががみんなの分ある/席がある/机を動かして席替えをする/砂時計があった/幼稚園より人が多い/先生が男の人	黒板がある/部屋が広い/3つあった/机がある/テーブルがない/机、椅子、黒板がある
授業	授業がある/授業がいっぱいある/授業が増えた/勉強すること/勉強があった/図工が楽しい/先生が言ったことをやらなければいけない/こんなに勉強するんだ/授業が真剣/シーンとしている	ピアノを使う/朝顔を植えた/勉強があった/宿題をする/授業をする/先生がきびしい
遊ぶ時間	休み時間が少ない/休み時間にいっぱい遊べない/遊時間はあったけど少ない/折り紙の本があった/登り棒が登りにくい	休み時間がある/幼稚園にない遊具がある/滑り台がない/遊び時間が少ない
生活	給食の量が増えた/給食が美味しい/本を借りられる/トイレが洋式ではなかった/掃除をいっぱいする/当番がある/通学路	違う幼稚園の子がいる/知らない友だちがいた/チャイムがある/当番がある/外をきれいにする/4時間目の後で給食/弁当がない/ランドセルが重い/本を借りられる
その他	6年生がいる	サッカーの網がない

きょうだいの有無による小学校生活で驚いたことについての時期別の偏り

term 1, term 2 のそれぞれについて、きょうだいの有無により、小学校に入学して驚いたことがあったかの有無に偏りがあるかを検討した (Table 4)。直接確率検定を行った結果、term 1 ではきょうだいの有無による有意な偏りが示された ($p < .05$)。一方、term 2 ではきょうだいの有無による偏りは見られなかった ($n.s.$)。また、きょうだいの有無それぞれで時期による偏りがあるかを直接確率検定により検討した。その結果、きょうだいがいる児童では時期による有意な人数の偏りがある傾向が見られ ($p < .10$)、term 1 に驚いたことがあったと回答した幼児の割合がterm 2 の幼児に比べ多かった。一方、小学生のきょうだいがいない児童については時期による人数の偏りは見られなかった (直接確率検定, $n.s.$)。小学校に入学後の驚きの内容を「校舎・校庭環境」「教室環境」「授業」「遊時間」「生活」「その他」に分類したものをTable 5に示す。

考 察

幼児期の小学校への期待、小学校の満足度

二期における幼児を対象とした「小学校への期待」については、各時期の得点はいずれも3.5点を超過しており、幼稚園で進学を待つ幼児は小学校を非常に楽しみにしていると言えるだろう。これは大島 (2016) で示された結果と同様であった。一方で、何を楽しみにしているかについては、一番多い回答は両時期ともに「勉強」であった。小学校に行くと、幼稚園ではし

ていない「勉強」に取り組むことを幼児が非常に前向きに捉えていることがうかがえる。一方で、教科名や具体的な学習内容を楽しみにしていることとして第一にあげる幼児は比較的少ないことから、具体的な「勉強」のイメージはあまりできていないことも考えられる。具体的なイメージがない中で、これから起こることを楽しみに思えることは幼児期の特徴の一つなのかもしれない。

また、進学後の小学校の楽しさについても、時期による差は見られたもの、平均得点は3.6点以上であり、子どもたちは進学後、小学校生活を十分に楽しんでいることが示されたといえる。

園舎環境、きょうだいの有無の影響

小学校への期待：小学校への期待については、園舎環境ときょうだいの有無の影響の交互作用が見られた。小学校と物理的に距離のある中で過ごしたterm 1 の年長児は、きょうだいがいない幼児の方がきょうだいがいる幼児よりも小学校への期待が高かった。また、きょうだいの有無による差は小学校の中で幼稚園生活を送った経験を持つterm 2 の幼児では見られなかった。さらに、きょうだいがいる幼児のterm 1 とterm 2 における期待得点に差が見られ、term 2 において期待の得点は下がっていた。

本調査では、小学校のことを知っていることが小学校生活をより楽しむためには大切なのではないかと考え、きょうだいがいる幼児の方がきょうだいから小学校の様子を聞くことで、さらに、term 2 の幼児の方が小学校の中で幼稚園生活を送ることで小学校への期待が高くなることを予測したが、調査では逆の結果が

示されたと言える。小学校について「知っている」ことが期待を高めると考えていたが、小学校についてよく知っていることが彼らの不安も高める可能性も浮かび上がったと言えるだろう。実際、小学校に通うということは子どもにとって楽しいことだけではないだろう。生活環境の中から、もしくはきょうだいから小学校に通うことの大変さを知ることで、より具体的に自分の小学校生活について思い描けるようになり、楽しみである一方で辛い側面についても意識できるようになっていくことで、より小学校について理解できる環境にいる幼児の方が小学校への期待の得点が下がる傾向が示されたのではないだろうか。

小学校生活の驚き：小学校に入って、驚いたことがあるかについては、term 1 ではきょうだいの有無による差が見られたが、term 2 ではその差がなくなった。また、小学生のきょうだいがいない児童についてはterm 2 よりもterm 1 の方が驚いたという回答が多かった。これは、幼児期に尋ねた小学校への期待と同様の方向の結果が示されたと言える。幼稚園と小学校という全く異なる施設に移るため、入学当初に児童に驚きが生じることは当然ではある。しかし、年長のきょうだいや園舎環境など就学前に小学校についてより理解していることで、入学する児童の環境自体への驚きは少なくなる可能性が示唆された。

小学校生活の満足度：進学後、小学校生活を楽しんでいるかについては、きょうだいによる違いは見られなかった。調査を行った6月末の段階では、すでにきょうだい等からの小学校についての知識の差は日常生活の中で解消していることが伺える。一方で、時期による小学校生活の楽しさにわずかではあるが差が見られた。小学校への期待には時期による差は見られなかったことから、term 2 の児童の方が幼稚園時代に期待していた小学校生活とのズレを感じている可能性が高いことになる。この差が生じた理由について、環境の違いが影響しているものであるのか、今後も検討していく必要があるだろう。

保幼小連携への提言と本研究の限界

本研究から幼児が小学校をととても楽しみにしていること、そして、幼児にとって小学校が「よく分からない」環境にある方が、より「楽しみ」であると感じる可能性が示された。一方で、小学校をよく知る環境に

あったことは小学校入学後の児童の驚きを少なくする可能性も示されている。

小学校への期待は、「高いことがいい」というわけでは決してないのかもしれない。中澤・泉井・本田(2009)などでは、幼児は自身の能力などによらず、高い有能感を示すことが明らかになっている。つまり、物事を楽観的に捉えることは幼児の特性とも考えられる。その中で、より具体的なイメージを持ち、不安も感じることも必要なのかもしれない。その上で不安を解消する機会を持つことができれば、幼児は真の意味で小学校を楽しみに感じられ、さらに進野・小林(2000)が示すような、思い描いていた小学校とのギャップを感じることは少なくなるのではないだろうか。

そのためには、本研究で示したとおり、幼児期により小学校について知る機会を設ける必要があると考える。研究協力園ではterm 1 でも園児の小学校訪問等は行われていた。しかし、term 1 では兄弟の有無で入学後の驚きに差が出ている。このことから、特別な単発の交流活動ではなく、自然な日常での交流機会を増やすことで、小学生のきょうだいがいない幼児であっても具体的な小学校のイメージを持つことができると考えられる。さらに、その中で小学校生活の楽しみや不安を、信頼できる保育者や友だちと共有する機会を設けていくことが重要なのではないだろうか。一方で、小学校への期待の程度や小学校に入ってから驚いたことがあるかについてはterm 1 とterm 2 の間では差が見られなかった。今後はきょうだいの有無の影響がなくなる以上の効果が見られなかった理由についても検証する必要があるだろう。

本研究は同一の幼稚園から小学校へと移行する子どもの2年間を追ったものであるが、小学校への期待や小学校生活の満足度には園舎環境やきょうだいの有無以外にも集団の特性や保育者・教員など様々なことが関わっているだろう。今後はこれらにも着目して小学校への子どものスムーズな移行についてさらに検討していく必要があると考える。また、現在の日本において、一つの幼稚園の園児の全員が同じ小学校に進学する環境は非常に稀なものである。今後、園児が複数の小学校に分かれる幼稚園などで調査を行う中で、本研究で示された内容が同様に見られるのかについても検討していきたい。

註

- 1 幼児を対象とした調査では、以下の質問に加え、term 1では、幼児の自己肯定感と遊びたい相手、小学校は何をすることか、どんな小学生になりたいかについての質問を、term 2では遊びたい相手についての質問を行なっているが、本研究ではこの質問についての結果は割愛する。
- 2 小学生の調査では以下の質問以外に両時期で「今、困っていること」についても質問を行った。本研究ではこの質問についての結果は示さないが、「困っていること」を挙げた児童については、どうすればいいかを一緒に考え、調査者が必要であると判断した回答については、児童の許可を得た上で担任に、「困っていること」として報告した。

引用文献

- 石田友貴 (2015). 「教師が育つ」連携のあり方について：保幼小連携校園における教師の子ども観・指導官の変容の分析を通して 東京学芸大学教職大学院年報3, 109-118.
- 岩田美保 (2009). ある5歳男児の就学期にかけての家族間コミュニケーション：母・兄弟間会話への参入過程に着目した夕食時の会話の縦断的検討 発達心理学研究20, 264-277.
- 菊地知子 (2005). かたいリュックサックへの憧れと、かたい言葉へのとまどい 幼児の教育104, 60-63.
- 松嶋洋子 (2017) 「国内における幼小接続研究の動向」国立教育政策研究所「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」〈報告書〉19-29.
- 松嶋洋子・無藤 隆 (2013). 小学校生活科と幼児教育とのつながり—接続黄カリキュラムの検討を通して— 白梅学園大学・短期大学 教育・福祉研究センター研究年報18, 39-46.
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 中澤潤・泉井みずき・本田陽子 (2009). 幼児の有能感の認知と遂行との関連—幼児楽観性の視点から—千葉大学教育学部研究紀要57, 137-143.
- 大前暁政 (2014). 小1プロブレムに対応する就学前教育と小学校教育の連携に関する基礎的研究 人間学研究：京都文教大学人間学研究所紀要15, 19-32.
- 大島みずき (2016). 幼児の自己評価が未来への期待に及ぼす影響 発達心理学大27回大会発表論文集464.
- 進野智子・小林小夜子 (2000). 幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学研究Ⅲ 長崎大学教育学部紀要—教育科学—59, 53-68.
- 高木友子 (2019). 小学校スタートプログラムにおける読み聞かせの利用について：小1プロブレムから円滑な接続へ 湘北紀要40, 83-92.
- 寺田清美 (2013). 保小連携の課題 保養小連携に関する調査研究報告書 日本保育協会, 15-29.

謝辞

本調査にご協力いただいたお子様に感謝いたします。

また、群馬大学教育学部附属幼稚園、および群馬大学教育学部附属小学校の先生方には調査にご理解いただき、多大なるご協力をいただきました。重ねて御礼申し上げます。

付記

本論文は2018年、2019年の教育心理学会の大会で発表した内容に新たにデータを加え、再分析したものをまとめたものである。

(おおしま みずき)

